

暴風雪等に関する営農技術対策について

平成19年 2月14日
北海道農政部

平成19年2月14日5時札幌管区气象台発表の「暴風と高波に関する北海道地方気象情報 第3号」によると、山陰沖にある低気圧が急速に発達しながら、北海道の西海上に進み更に発達する見込みです。このため、道内は、14日夕方から日本海側南部地域と太平洋側西部地域で南東の風が非常に強く局地的に雨量が多くなることが見込まれております。また、15日昼過ぎからは、強い冬型の気圧配置となることが予想されており、太平洋側東部地域やオホーツク海側を中心に全道的に強風や大雪が見込まれておりますので十分注意してください。

今後の地元气象台・測候所の気象情報 (http://www.jma.go.jp/jp/kishojoho/101_index.html)等に十分注意し、注意喚起している事項の徹底に努めてください。

暴風と高波に関する北海道地方気象情報 第3号

平成19年2月14日05時00分 札幌管区气象台発表

(見出し)

北海道地方は、14日夕方から16日にかけて、急速に発達する低気圧の影響で、風が非常に強くなり、突風を伴い、海上は大しけとなる見込みです。暴風や高波に警戒して下さい。

(本文)

山陰沖にある低気圧が急速に発達しながら、14日夜には北海道の西海上に進み、15日には北海道付近で更に発達する見込みです。このため、北海道地方は、14日夕方から日本海側南部と太平洋側西部では南東の風が非常に強くなり、大しけとなるでしょう。15日夜から16日にかけては、日本海側やオホーツク海側では猛ふぶきとなる恐れがあります。太平洋側西部では、14日夕方から15日朝にかけて雨が降り、局地的に雨量が多くなるでしょう。太平洋側東部とオホーツク海側では、14日夜遅くから16日にかけて、山間部や峠を中心に大雪となるおそれがあります。

<風と波の予想>

15日朝までの最大風速 東または南東の風

日本海側と太平洋側西部 陸上20メートル、太平洋側東部 陸上18メートル

最大瞬間風速は、最大風速の1.5倍から3倍以上になる場合があります。

<降水量の予想>

14日06時から15日06時まで 太平洋側西部 80ミリ

<降雪量の予想>

14日06時から15日06時まで 太平洋側東部 40～50センチ

その後16日にかけては、オホーツク海側でも大雪となる恐れがあります。

* 一部抜粋

第1 畑作物・園芸作物

1 各作物共通

- (1) 今回の大雪は湿気を多く含み解けやすい状況にある為、融雪によってハウス内に融雪水が浸透し、地温低下や育苗ハウスが過湿条件となり、苗の徒長や病害の発生、生育不良の恐れがある。すでに融雪水が浸水している場合は排水に努め、ハウスサイドの除雪、ビニール被覆を行い、融雪水の浸透防止を図る。
- (2) 1月6～8日の暴風雪、大雪で被災したハウスは、速やかに支柱等を点検し修復に努める。その際、曲がった支柱については強度が低下していることから、応急処置を除き使用は避ける。
- (3) ビニールが破損した場合は、育苗中の苗はトンネル保温等により、低温障害の回避に努め、速やかな修復に努める。
破損していない育苗ハウスがある場合、移動可能な苗は、臨時的に移動して保温に努める。

2 てんさい

(1) ハウス管理

育苗ハウスでは、ビニール被覆作業が行われている。今後作業が進むと同時に積雪対策も重要になってくる。雪の重さによりハウスが倒壊しないよう注意する。

3 たまねぎ

(1) 育苗

ア 3月上～中旬に、は種予定の中・晩生品種の育苗ハウスは、まだ被覆作業を終えていない場合には除雪や被覆作業を急ぎ、は種予定日までに床土が適度な土壤水分となるよう保持し、地温が十分上昇するようにハウス管理を行う。

今後は、適期は種を念頭においてハウスの除雪・被覆作業を計画的に進める。また、土壤凍結が浅い（北見農試畑地観測点で現在5cm以下）ことを十分に考慮して作業を効率的に行う。

イ 2月下旬～3月初めに、は種予定の早生品種の育苗ハウスは、床土の地温を十分に上げておき、速やかな発芽ができるように準備する。

a 土壤の水分状態を確認し、は種1～2日前に苗床の深さ10cmまで湿るように水管理を行い、ビニールでマルチして地温を高めておく。

b は種後トレイをならべ終わったら、日中気温の高い時間帯にかん水し、十分地温を高めてからシルバーポリで被覆する。

ウ すでに、は種作業を終えた極早生品種の育苗ハウスは、ハウス内の適切な温度、湿度、水管理などに留意して健苗の育成に努める。

a は種から出芽までの最低地温0以上、平均地温7以上（最低でも5以上）、トンネル内最低気温は-5以上、平均気温10前後を確保する。二重トンネルにより地温の低下を防止する。

b 出芽揃いから本葉1葉期は、出芽後子葉が2～3cmになったら、育苗トレイの上に被覆していたシルバーポリなどを除去する。夜間は二重トンネルで地温の低下を防止する。

c 本葉1～2葉期は、トンネル内の最低気温-2～0、平均気温15前後を確保す

る。昼間は天候にあわせてトンネル換気やハウスの肩換気を行い、夜間は二重トンネルにより地温を確保する。ハウスの肩換気は、風下側で行う。

d 「かいよう病」は、子葉展開から本葉2葉期の低温・多湿条件で多発する。特に、成型トレイ育苗では出芽揃い後のかん水で過湿になりやすく発生を助長するので、晴天日の気温が高い時間帯にかん水を行う。

4 野 菜

- (1) 現在栽培されているトマト、メロン、ピーマンの苗は、ビニールが破損した場合、低温障害による花房、花への影響、きゅうりは生育、いちごは花質への影響が懸念される。影響の程度が大きいと予想される場合は、新規育苗、作型変更等を検討する。

第2 畜 産

1 生産施設等の点検

- (1) 降雪等により、倒壊の恐れのある建物は可能な限り補強するとともに速やかな除雪を行う。
- (2) 積雪の状況に応じ、畜舎軒下等の除雪対策に万全を期す。特にD型畜舎やハウスなどについては除雪作業をこまめに実施し、積雪による倒壊を防止する。
- (3) 農場入り口から牛乳処理室までの道路は可能な限り除雪に努め、幹線道路が通行可能になったら直ちに生乳出荷や資材搬入ができる体制をとる。

2 停電への対応

停電により搾乳及びバルククーラの冷却ができない等、作業に支障がある場合は次のことに留意する。

- (1) 前回搾乳から16時間位までの搾乳中止は、乳量や乳質に特に問題は生じない。
- (2) 発電装置が手配できる場合は、それらを利用して搾乳・冷却をおこなう。
- (3) 発電機は必要電力に対し十分に余裕を持った機材を用いる。
- (4) 停電中、バルククーラに冷却中の生乳は速やかに集乳するよう体制を整える。十分攪拌しないでサンプリングした生乳検体は、体細胞数が異常に高まることがあるので注意する。また、出荷する際には、細菌数の検査を実施する。
- (5) 手搾りが可能な酪農家は、泌乳前期牛の搾乳を優先する。
- (6) その他、停電で使用不能となる設備の確認をする（例えば、水槽揚水ポンプ、サイロのアンローダー、電気牧柵、自動給餌機、電気温水器、照明器具、自動哺乳装置）。

3 道路の不通により生乳出荷ができない場合

幹線道路の除雪が間に合わず、出荷できない場合は次のことに留意する。

- (1) 情報収集に努め、除雪や集乳状況等の確認を行う。
- (2) やむを得ず廃棄する場合は、環境汚染防止に努める。

第3 今後の大雪への準備・対策

今後、2～3月にかけて大雪も考えられることから、大雪や吹雪に備えてビニールハウスの補強用支柱、筋かい用パイプを予め準備しておく。

(1) 今までの降雪に対する対応

今までの降雪により施設各部の損傷・ゆるみ・たるみなどがいないか総点検し、必要があれば速やかに補修する。また、今後の大雪に対する対策を容易にするため、ハウス周辺の堆積雪は除雪する。

(2) 大雪の事前準備

大雪時の応急補強用支柱・筋かいなどは、予め利用しやすい場所に整頓保管し、大雪予報が出されたとき直ちに設置する。

屋根被覆材の表面に、雪の落雪を防げるような突出物等がないか予め点検しておく。また、ビニールのゆるみ、押えひも等の再点検を行う。

風の強いところでは、降雪に加えて風によるハウスへの負荷が大きくなるので、施設周囲での防風網設置も考慮する。

(3) 降雪時の対策

雪が積ってきたならば速やかに雪降ろしを行い、雪でビニールがたるみ落雪が困難になるのを防ぐ。

ハウス周辺の堆積雪は、屋根雪の落雪を妨げ、施設の側壁に側圧を加えることとなるので、速やかに除雪する。

ハウスの気密性を高めることによってハウス内の保温を図るとともに、加温設備がある場合は、雪が降り始めたら可能な範囲で室温を高め、屋根面を暖めて落雪を促す。二重ハウスの場合は日中内張りを開放し、外張り天帳面を暖める。ハウス内作物がある場合は、作物の適温管理を優先する。

雪は、風によって吹きだまりを作ったり、日照によって南側の屋根雪だけが落雪したりして、屋根雪が偏ることがある。このため、ハウスへの負荷がアンバランスになることがあるので注意する。

(4) 降雪後の処置

降雪後は、施設各部の損傷・ゆるみ・たるみなどの有無を再度総点検し、必要があれば速やかに補修する。